

栃書連会報

第 4 号

栃 木 県 書 道 連 盟
振替口座 宇都宮5-15222
会 長 七 海 水 明
〒320
栃木県宇都宮市花房3-2-25
TEL (0286) 34-0622
編 集 事 務 局
印 刷 ショウワ印刷(株)

うまくいった二つのこと

会長 七 海 水 明

◇中国視察

本会主催で中国を視察に行こうという話が出たのは三年前であるように思う。重原先生の発言である。中井先生などはその頃四回位行っている。会員の中にも何回が行っている方もあったようで、昨年の総会の折皆さんに話しかけたところ「それはいい」ということで、視察の経験のある方々の意見をきいたり、日本交通公社に調査を依頼したりなど提案者重原先生の労苦は一方ならぬものがあつた。私は一応責任を持たなければならぬ立場でありながら事情あつて参加出来ないというわけで、心では実現させなければと思うわけである。文書が出されて応募者がポツポツ出てくる様子を見て、これは何とか三十名位

には達するものと安易に考えるようになった。何回か打ち合わせをしているうち参加者が二十七名となり交通公社側との出発前の打ち合わせとなつた。白石先生が団長に推され、秘書長重原先生、副秘書長増淵さん、松本先生、それぞれの担当がきまつた。参加者の中には本会々員でない方もあつたがこの計画が取り消しになることよりは上々と思つてむしろ大変嬉しく思つた。かくして、暑い暑い七月二十六日全員元気で出発した。訪中期間の皆さんの様子は別冊によつて詳細報告されているので省略するわけだが、とにかく八月八日上海発の日本航空で羽田空港に十七時五十五分に全員無事帰国された。数日後反省会を開催された折、私も招かれて出席

したが、全員出席、そしてこれほど楽しくなごやかな会であつたことは何によるものであろうか。それは団長白石先生のお人柄と役員各位、そして参加者の皆さんの協力によるものである。白石先生ほんとうに御苦労様でした。深く感謝申し上げます。

今回の新計画が大成に終わったことは本会の面目がたったことであり、私としては、会員の皆さんの心からなる御支援御協力を身にしみてありがたく感じた次第です。

◇女流作家展

五月十一日から五月十三日まで栃木会館ギャラリーで開催、出品者四十五名、観覧者実に八百名、新企画としてのこの展覧会もまた大成功といえると思う。本来ならば女性が企画運営一切

を自らの手によつてやるのがほんとうであろうと思つたが、第一回でもあるので、本会の役員がやらなければならないようになったわけである。大体の骨子と具体的な運営の案が出来たので出品者の代表の方を集まつていただいて最終打ち合わせをした。開幕にあたり、代表の方に受付を依頼した。はじめ出品者二十名位かなと考えたりして一抹の不安もあつたが、女性会員の半数の方が出品ということ、

こんどはどう飾るかという心配が出た。でもよく飾れたと自負している。作品の内容についてご覧になられた方はよくご存じのことと思う。何れもすぐれた作品であつたことは同感であらう。第一回としてはまことに嬉しい結果を見ることが出来た。来年もまた続けていきたいと思つている。

女性各位の一層のご精進を期待してやまない。



第37回

栃 木 県 書 道 連 盟 会 員 展

昭和58年 6月 24日、26日

栃木会館上下ギャラリー

批評 古沢 素雨(貞香会)

五江測 霊水氏 細い線、面白い。アクセントがほしい。

佐藤 堪氏 波法を生かした古典にのっとった作品。落款にかな交じりを入れるのも、一つの生き方で面白い。右払い四ヶ所あるが変化を。

佐野 景石氏 潤筆、隸書でうす墨は損。細い線きかせて品のいい作品。

齋藤 和子氏 同じ調子になっ

てしまった。変化をつけた方が面白かった。

齋藤 希堂氏 お習字のような程度

の作品、画仙紙を用いれば墨の味をだせた。文字に大小

の変化をつけ、字を小さく、打開

できると思う。

齋藤 美与子氏 うす墨の場合

墨のにじみ、文字の構成で見せるのだと思う。最終画を少し工

夫されたらよかった。

沢田 寛氏 濃墨でぐいぐい押

して行った、確かに強い。「力」

の部の筆の線に工夫が必要であ

る。

酒井 真沙氏 構成面白いが、「定」

に含みを持たせて、「心」に軽さがあ

つていい。紙面にしめる文字の配置はよい。同じ

じみで、何かほしい、いま一歩

沢田 幽石氏 構成は面白い。線に何か一寸、重さがある。もう

う少し線にくふうを。

重原 聖鳥氏 主張を加味したところ

にいいところがある。一筆一筆の線の切れ、よろしい。作品化する

という気持をもう少し強く。変化をつけ、臨書の意味を。一つの作品として面白

感のあるところと軽いところと変化をつけたら面白かった。

篠原 松情氏 線は面白い。隸書風なところも見られる。文字に深みや面白味がでてくる。どこかでかすれをだしたら、明るくなつたろう。

杉山 弘育氏 線が弱い。形はいいが、どこか上の方に強さがあるか、「盟」の「る」部、変

形させてまいたらよかった。

相馬 天外氏 木の彫り方はわからないが、文字の構成でいい

たい。篆文、「終」という字は

小篆、「車」をもう少し面白くしたかった。「無」の下の「火」

上の「二」の部を大きくした方が面白かった。落款の左に少し

余白を。

鈴木 小苑氏 全部、同じような感じがする。もう一寸軽いところを。一枚のうちに何か軽さがあ

った方がいいのでは。五枚一組、つまつたところ、すいたところあり。一枚目、二枚目に

一工夫を。

田部井 秀峰氏 線、字の終筆が気になる。ねずみの尻尾に見

える線が目立つ。

中井 史朗氏 淡墨(程君房)、小さい作品なりに味

のある作品。一字二字目に

変化があり、面白味、構成独特。

七海 水明氏 素晴らしい作

品。大きい作品はむずかしい。二文字で多数字の作品と同じくしなければなら

ない。変化あり、このまま篆文で書き直したら面白い。

川俣 左舟氏 濃墨、線が

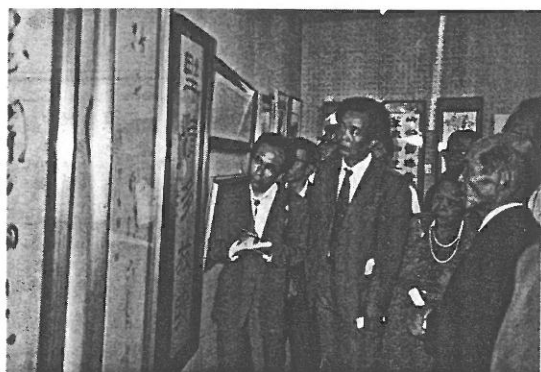
しっかりしている。どこかで

で見せ場をつくつたらよかった。

白石 宙和氏 落款面白い。

隸、楷、行、交じり、中国の昔の「曲」二字あるが、

変化あり。「岡」の字、面



白い。二つの「人」になげなく入れた。見ていてあきない作品だ。

新井 幽石氏 筆をしつとりさせたら、にじみがでたと思う。

にじみの効果、一寸損をした。

兼目 悠久氏 細い線で、墨の色、いい。一字一字になつてしまつた。どこかで連綿にしたら面白くなつたろう。「萬」いい。

「象」は鳥に見える。最終点、弱い。しかし面白い。

高梨 峰鶴氏 変化あり面白い。筆もよくきいている。線の切れ

もよい。「白雲」大きくとつたのがよい。「雲」は篆文調のを入れている。渴筆と含んだところのコントラスト、いい作品だ。

高橋 竹瑞氏 これだけの字数を入れている作品だ。下部がつま

つた感じ。一、二行の上部よい。線もいい。

塚本 瑞峰氏 中央部、同じ調子になつてしまつた。流れ、よ

どみがない線、面白い。

土屋 欽瑛氏 線がきれいだ。

細い線をきかせて、右に重量感を持たせ、左軽くしている。

「お」文字の結体に工夫を。

豊田 静迪氏 文字を平均に散

らしてしまつた感じ。一行の下

の四文字に一工夫を。字の構成、

筆運び面白い。紙面にのせる文

字の布字について一寸工夫を。

生田目 史雲氏 一気に書いたようだが、一寸きたならしい感じ。最初墨をたっぷり含ませ、ゆっくりと。旁の方はきれいに流すとか、工夫を。初めから終りまで同じ調子だ。

荒牧 桂舟氏 いい作品だ。これだけの字数、面白い、隷書風のものもある。下部つまった。大小つける必要なし。

中野 永峰氏 淡墨でのっている。線よくきいている。面白い。下部変化あり。

長沢 瑞祥氏 もう少し右に寄せて、落款を考慮してほしい。線がややかたい。柔軟な線を。

「帯」のまき方、一本調子だ。長嶋 石城氏 墨色、文字の構成よし。「山」一寸どうだろうか。いい作品だ。

成田 穂州氏 一寸かたい。字はうまく入っているが、「我」の線がかたい。落款もう少し上にあけてほしい。

長嶋 壮典氏 堂々と書いている。筆の緩急をつけたらよかった。運筆の力はある。

西尾 青鳳氏 最後の「神」で変化をつけているが、やや細すぎた。ねらったと思うが、他はいい字だ。

倉沢 竹邨氏 「離」の部、篆文で扁、旁をひっくりかえした

り、大小の変化をつけたりするが、デフォルメ、一つの方法だが、「別」の口の部、一画目、上にでてしまった。紙面にのせ

た文字の位置、面白い。文字そのものの工夫、わざとアンバランスにしたり、墨量の変化など面白い。



小林 庸子氏 面白い。最後の終筆部、気になる。重量感があつたらよかった。二字目の「欺」を大きくして、下小さくした方が文字に安定感がでると思う。「己」大きすぎた。

川島 汀浦氏 面白いが、上の二字は画数多い。これが逆になつたらよかった。面白い。篆文調。

柿沼 翠流氏 面白い。「印」の位置はどうか？一本の線でいっているからこれでいいか。

川上 大岳氏 同じ調子の線。ヤマ場がほしい。「聲」で変化をとつたらヤマ場ができた。

加藤 聰空氏 適当にヤマ場あり面白い。二行目を中央部によせたらよかった。文字はいいがのせ方に工夫を。

嘉久和 尚道氏 「神」はいい。「妙」形はいいが、湯筆ほしい。大谷津 紫水氏 堂々としている。文字はいい。構成で「氣」の部を大きくした方がよかった。文字の構成については文句なし。文字として上手だ。

岡本 清秀氏 「雲」を「云」にしたならどうか。「熾」を略して甲骨、金文で工夫したら。

大塚 蓮情氏 一字一字は立派である。あまりきれいで上品すぎ、面白くない。

大友 龍昌氏 几帳面すぎ。文

字そのものはいいい。一寸遊びがほしい。

小倉 溪峰氏 一寸かたい。流れがほしい。

生沼 冬情氏 隷書でも、古典にのつとっているが、終筆に重量感を。下部弱い。文字も下部小さい。上部と平均化されたら書き終った後に、わくの線を入れてゆくと味がでてる。落款は中央部に。

生沢 道子氏 字をうまく入れているが、上部に重量感を。構成よし。

石田 鶴邨氏 うまく配置している。文字ややかたい。

石川 六濤氏 いい作品だ。中部だけに重量感あり、三行目の上部に重量感あればよかった。

石川 善克氏 線の強さあり。肩上りの傾斜とものっている。落款やや軽い方がよかったのではない。

石井 清豊氏 印の押し方、やや離れすぎ、一頼の方が瀟洒になつたと思う。印の押し方の勉強を。

小瀧 きみ氏 俳句、ややかたい。終りで軽く。「やや」の部分が重なった。

菊地 春水氏 篆文でこうした方法でいっているからいいが、作品としては面白くない。

岸 豊水氏 文字の大小、濃淡、

線、言うことなし。申しあげる
ことなし。

木曾 梅邦氏 二行にしたら一
寸紙面が生かされた。墨色いい、
面白い。「駅舎」の部、線がつ
づいたらよかった。

川合 峨山氏 面白い。文字の
配置いい。見事。

川上 尚雲氏 さすがに線はき
れいだ。よどみがない。いい作
品だ。線に味があり、切れてい
る。

谷古宇 栖洞氏 古典にのつ
りいい。(楮遂良をやった)

なかなかいい作品だ。楷書はむ
ずかしい。線の中に変化あり。

「書」面白い。線が切れていて
よい。一字一字変化あり面白い。

平石 岳城氏 紙面に堂々とい
入れている。一行下部つまった。

広本 春華氏 うまく入ってい
るが、二枚目、もう少し濃淡の
変化を。三枚目に落款はわざと
らしく不自然である。

益子 翠茗氏 いい作品だ。落
款の文字面白い。これを作品に
書いてもよい。特に言うことな
し。

本多 雨情氏 作品はいい。字
面白い。工夫している。言うこ
となし。墨の濃淡もいい。線の
切れもいい。

増田 松香氏 平凡。字を散ら
したのみでヤマ場なし。条幅の

まとめ方を勉強されたら。

増淵 硯水氏 渴筆の部で工夫
をされたらよかった。文字の流
れいい。潤濁にアクセントをつ
けたらよかった。

湯沢 誠氏 文字の構成はいい
が、線が軽い。

村田 幽香氏 線は面白いが、
「屋」の至の頭の部、弱い。線
に変化を。

矢内 硯風氏 平均化している。
ヤマ場ほしい。どこかに変化、
見せ場を。

山下 スミ氏 女性が書いたと
思えない。いい。「雲」の流れ
が重すぎる。しかし、堂々たる
作品。

赤沢 豊氏 「中」篆文、縦画
強すぎた。上二つ、下一つにし
て変化を。形としては面白くな
った。「懷」はいい。構成は面
白い。

新井 幽秋氏 面白い。材料は
木のようだが古代色が面白く、
銅の感じがでている。

矢内 竹華氏 きれいだ、文
字の大小の研究を。画数の多い
字を大きく、少ないのは小さく
すれば調和がとれる。落款の書
き方は問題だ。題名でなく、年
月を入れるか、春夏秋冬の詩と
書かなければいけない。

吉田 道夫氏 特徴のある作品。
細い線で流れあり。下三分の一

ややごちゃごちゃした感じをう
ける。

和氣 良克氏 (筆は中鋒、二
本の筆で合筆にして書いた)

線そのものはいいが不自然な感
じ、しかし「夏」面白い。「遊」
の字、旁としんによるのつりあ
いに工夫を。

渡辺 登水氏 字の大きさ統一
したようだがやや弱い。字、線
の行き方、面白い。

秋山 無涯氏 「甲斐」よい。
「居」はどうか? 斐の線の変
化は面白い。

吉田 天籟氏 線によどみなく
きれい。上手だ。

受賞者

連盟賞を 受賞して

嘉久和 尚道

比度の連明賞まさに恥かしさを
知る。何しろ出品期日の真近に
せまりたるも題材とて決定出来
ず、思いきり淡墨にて何時も淡
墨のむづかしさを知りつ、も何
とか自分なりの書とを心にきめ
五日位で仕上げ出来上ったのは

斎藤 笙風氏 面白い。濃墨で
一寸重量感があったらしい。そ
ばで見るときれいだ、離れて
見るとやや一寸感じるが、これ
はそうではなくねらいはあった
と思う。

山中 香葉氏 竹筆で書いたよ
うだ。(かたまつた筆で書いた)
字はいい。変化もありうまくお
さまっている。

入江 真海氏 文字の小さい
が、「辺」の字に変化を。下部
つまつた感じ。

阿部 瑤蒲氏 唐紙に淡墨で書
いたから弱い。にじまない紙だ
つたら墨をおくようにして書く

只皆様の御覧になつた様な愚作、
自分の不勉強のみが目に見える
だけ、それが連盟賞とは過去及び
現在における恩師に恥をかかせ
る様な作、今後はより一層何時
も思いますが、古典に取りくみ
此の賞に恥じない様、努力致し
たいと思ひますのでよろしく御
願い申しあげます。

文責・大谷津 昭男

品もそうでしたので、嬉しいや
ら、恥しいやらただただ汗顔の
至りです。

このような立派な賞の受賞の
影に諸先生方のお力添のあつた
ことを感謝申し上げ、賞に恥じ
ない、そして心にゆとりのある
作品を生み出したい心掛けて行
きたいと思ひます。紙上をお借
りしてお礼申し上げます。

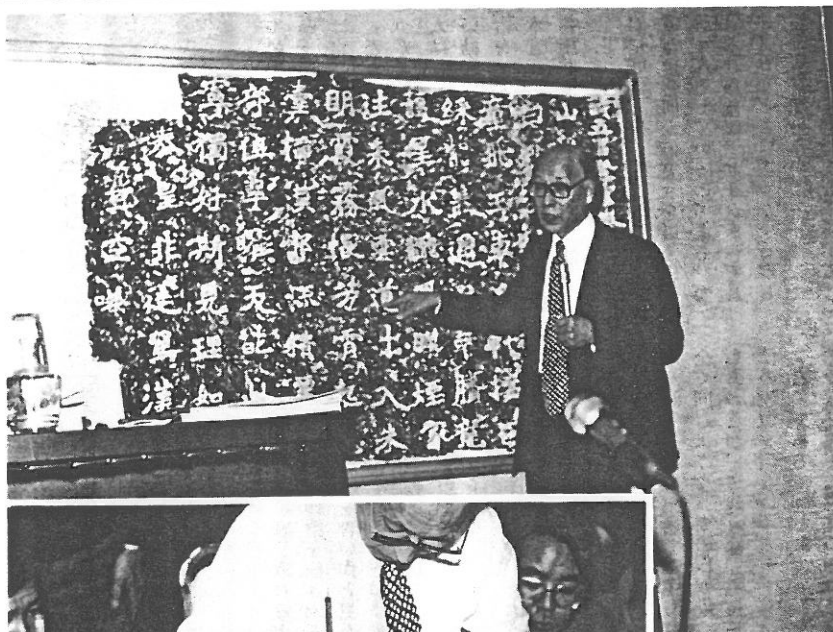
連盟賞を戴いて

諏訪 公道

日頃は忙がしきにかまけて、
不勉強な毎日です。書展が近づ
くと俄仕立の作品で間に合せて
おります。この度の連盟賞の作



実技講習会に参加して



恒例、会員の研鑽の場である実技講習会は五十九年二月二十六日、丸治ホテルに於て開催された。講師は毎日書道展審査会員、独立書人団理事、東京芸大の講師をつとめられ、本会の副会長でもある中井史朗先生である。丸治ホテルの会場については盛況の裡に鄭道昭の臨書をテーマに講議そして実技指導にと有意義な実のある会であった。書道の実技がたった一日の伝達講習でその実技の習得を果たすということは難しいことではあるか

も知れない。しかし、ともすれば師弟の縦の絆のみに頼って師風を遂うという一つの殻に閉じ込められがちな書人達にとつて師以外の秀れた筆づかいを眼前にすることができるといふことは何といつても己れの書芸に拡がりを与えてくれるという点で素晴らしい機会であると思う。中井先生には近くに居られるがために却つてその奥義に触れることができなかったと思う。今回中央で御活躍の先生の研究の成果、技法を懇切、ていねいにお教え戴けたということは、会員の資質の向上に大いに貢献したと思う。ここに深く感謝するとともに以下講習の内容を略述して報告としたい。

会は七海会長の講師紹介に引き続き早速講演に入った。講議は先生が全日本書道連盟の訪中団の一員として山東省の泰山、曲阜、掖県を歴訪し、鄭道昭の諸碑の地理的位置を明らかにされたことから始まった。それは省都、済南を中心に雲峰、太基、天柱、有峰のいわゆる鄭碑四山にあるということなど。さらに康有学の作家批評を挙げて諸碑の説明がされた。例処「鄭義下碑」点画峻厚、血肉豊美「論經書詩」魄力雄強、筆法起越「登太基山詩」意態奇逸、虚和円勢、

「観海童詩」骨法調達、血肉豊美、「東塔石室銘」結構天成、興趣酣足、「此天柱之山」強毅雄大、「上遊下息題字」籀画沙、また臨書の態度にも触れられ、己の世界を拡大する目の仕事。自己の技倆を拡大するという手の仕事。特に鄭道昭のような摩崖碑の臨書態度としては明治の鳴鶴さんの臨書より、むしろ、天然の浸触後の趣きを臨書する方が唐碑を相手にするのは違つた次元に立つもので、摩崖碑の持つ良さを表現するものであると基本的態度を示された。未熟な小生には一時間四十分に及ぶ充実した講演の一端をも録することができない。講演の後スライドにより鄭道昭の作品を鑑賞させて貰い午後の実技指導に移つた。朝早くから懇親会の席上での御指導まで感激の一日であつた。

(松本記)



第10回県美術展

桑原 江南

一般出品二四九、入選一六六。
県下の書道に対する関心の高さは出品点数が示している。

だが、陳列には会場制限があつて、入選率は約々、三人に一人は止むなく見送りという厳しい結果になった。審査員（川俣古舟・七海水明・中野永峰・松本宜馨・桑原江南）は運営委員

養と人柄が如実に感じ取れるような、観る者の胸臆を揺さぶるような作、これを善い作と見たのだが、実はこうした作は案外少ない。善い書とは巧いだけでは産まれないのである。

次に出品作は書風にバライテがあつておもしろい。それぞれ異つた姿態であることは、人の顔が全部異なると同様に、作も全部異なるのは当然なのだが、実はこうした個性の相違というより師伝系統の相違で、中には全く同じような一束の作が幾つもあつたが、これらは、所詮師伝の模倣を出ないイミテーションなのである。同じ顔の人影をズラリ並べても意味のないことになるので、そうした類型作は代表に出て貰うだけとなるのは止むを得ないことだろう。一つ一つが何かを語りかけるような、真のバラエティーを冀望す。模作に留る勿れ、体裁造りに溺る勿れ。各自が自己の全精を筆に託して、よしんばへたでも不

裁でも、偽りのない自己を誠実に表現したものに勇躍突入して頂きたい。

もうひとつ大事なこと。書道

は文字を素材とする芸術である。文字を素材とすることは決して書芸術を束縛するものではなく、それが生命なのである。にも係らず誤字誤文若しくは誤字すれすれの苛い変形、こうした作は遠慮して貰うことにした。文字はことばである、ことばはこ

ろである。が故に、文字を尊重しことばに忠実であることが書道の基盤でなければならぬ。その基盤に立つた上で存分に働き自己の感懐を感じるように努めたいものだ。

受賞作品について具体的に個評を加え、観者とともに鑑賞し反省してみたいと思う。

概観して感想を若干述べることにする。

まず、みんな巧い。巧いとは表現技術のことを言う。書道は技術だけで拵え上げられたのでは困る。技法は所詮手だてたるに過ぎない。練り上げられた技法を駆使して、自己の感懐を遺憾なく紙面に吐露し、作者の教

芸術祭賞

（知事賞）

岑参送費子隴式昌

高橋 竹瑞

行書五行の長文を聊かの懈怠なく担々と書き進めて尽きざる余情を貽しているのは、心体ともに透徹した人の作なればこそであり、審査員全員一致で最高位に推したのである。奇道を往

準芸術祭賞

（県教育長賞）

秋

谷島 郁

和歌二首を一連に横額に書かれたまことに美しい作である。珠のように磨き抜かれた流麗さ、聊かの停顿もなく全幅を闊歩した暢達さ、快哉を呼ぶに吝かでない。筆技の極を往く清冽な作である。

出典が万葉集であるため、万葉がなを多く用いたのは必然の結果であつたろうが、万葉がなは語感からすれば大へん重いのであるから、助詞や助動詞などの附属語には余り用いたくない。読む段になると停顿して首をかしげながら一字一字判読しなければならぬ。作者は見た目豊かに表現すべく、文字遣いに苦

辛をしたであろう。が併し、その苦辛がどれだけ作品効果を満したろうか、却つて煩わしさとなつてはね返つたのではあるまいか。語意についても殆ど無視して「あら、ねはこのね、ぬる」といった切り方、さして咎め立てするほどのことではないかも知れないが、全幅がこれでは、語意を蹂躪することになる。歌二首の切れ目も墨を次いであるのやや安心したが、とも角読みにくい。書芸術は姿形さえ美しければ文字やことばはどうでもいいとするには固陋な審査員、まだ首肯し切れぬものがある。

準芸術祭賞

山頭火の句

小滝 きみ

漢字かな混用の近代詩文。同じ語が重複した短い句で、大へん表現しにくい題材であるにも係らず、見事に成功している。何せ明るく清い。平がなばかりで読み易いことも無理を一切排除した態度に出ずるもの。この無理をしないということ、これは自分の気持ちを卒直にぶつけることであり、作者と鑑る者との心の隔りをなくすことであり、

書道誌

・書友・

両者の心の交流が素直に成り立つのだから、親しみを以て見ることができるのである。この作の明るさは、空間を程よく按配していることによる。思切つて空白を贅沢に残し、凝集した墨痕と諧和しているのが、文字が力強く観者に迫ってくる。しかも左の空間を印一つでピタリ抑えて隙がない。聊か擁護たるところは最後の「夢」の一字。全幅の中でこの一字が異質の感がある。もつと滲透して素朴に深く沈潜させたかった。上半は見事、「ふるさと」と同じ語を畳みかけながら煩わしさがなければかりか、却つて興感を喚んでいる。

芸術奨励賞 五氏

湯沢誠氏の「藝」一字、増渕春雪氏の「虚心静慮」、五江渕靈水氏の「縁木求魚」、何れも規模宏博、紙面を圧しているが、それぞれ異つた角度から攻めており、岸豊水氏の「七絶一首」赤沢豊氏の「酬高使君」、ともに自己の書境を叩きつけて欣賞すべき佳作。

以上と厳しい評になったかと思うが、皆さんとともに今年度の芸術祭を振り返り、県下の書道水準を一層向上充実せんことを念願して筆を執つた次第、各位の御精進と御発展を祈念致します。

昭和二十二年七月創設・池澤畔蒲主宰、「正しく強く、明るい心を書に現わそう」を信条として池澤先生の指導で栃高商書道部有志により編集発行された。現在の書友誌は、誕生いろいろ池澤先生を中心に、小島畔堂、丸山曉鶴、磯部畔磧、富田幽蒲、田中曉亭、西村鶴洞、大森翠洲、渡辺蘭洲、田中松雲等をはじめ三十名の内員が執筆に参加、編集は、矢島漣浦、山崎素枝、川島汀浦、杉山幸枝が当たり、A5版50ページで、一般部(含)、高校大学生)条幅、楷書、行草、臨書、随意、かな、ペン字部等に、中学、小学、幼児部等七千余の会員を有し、会費月額二百円、毎月一回一日に発行。本年六月号で四三九号になる。毎月の競書の各部特選及び優秀作品百三十点と先生方の手本など書友会本部画廊に展示し会員の参考にしている。会の本部は、栃木市文化会館に近い旭町13-17杉山方にある。

(事務局 杉山 清幽記)

・筆邑会・

本会は、昭和三十七年一月、小山市文化功勞者、関沢鶴沙先生によって創立された。発足と同時に、月刊書道誌「筆邑」が発行された。以後、書作の研究会、年一回の筆邑書展を開催。

人間鶴沙先生の格調高い、そして深遠な書にひかれる者は、県内はもとより関東各県にひろがる。会員多数、書作展出品者も百数十名にのぼる。

昭和五十三年、先生亡き後も、その遺志を帯し筆邑誌継続発行(発行者関沢信子氏)筆邑書作展の開催等、清新な書求めて徴力ではあるが精進している。現在、理事長上野鶴陽を中心に豊田大仙、国木軒陽、野原梅峰、佐野景石、中島鶴州、鈴木小菟氏らによって運営されている。

社中だより

清明会

中野 永峰

初代会長殿田真齋先生により、昭和三十九年一月五日創設さる。五十三年五月二十五日殿田真齋先生七十四才にて卒。爾後中野永峰が会長を継続現在に及ぶ。

孔子曰、清明在躬、
氣志如神。

身に、清らかで明らかな心を保てれば、その志気は神のような働きをする。大いなる仕事をなすには、心をきれいにしなくてはならない。会名の由来である。

先日、井上靖氏の文化講演の結語として、嘗て春秋戦国の乱世を背景として、川のほとりに立つた孔子が感慨をこめて述べた言葉、

「逝く者は斯の如きか。
昼夜を舎かず」

を引用して、文学の移りゆく姿、時の流れはこのようなものか。昼となく夜となく流れ続けている。氏はペンクラブ会長の立場

からでしょうか。文学は世界平和、人類の幸福という命運に従って流れていかねばならないと強調していた。

清明会の命運、運命でなく敢て命運と呼ぶ姿も同じであると、ここに意を強くした次第である。

(事務局 宇都宮大学書道研究室内 〇二八六-三六一 一五一五-内線二八七)

虚心会

小川 仲秋

恩師宇野雪村先生、小山素洞先生の練成会にはその都度出席して指導はかくあるべきものと感銘をうけている。

虚心会に於てもこれに和して今尚古典をふまえた創作の指導にあたっている。市内中央青年の家、市民の家、那須益子の青年の家などで(一泊二日・二泊三日)の研修会を行ない実力の養成につとめている。創作にあたっては自分の自然な心を大切に、尚現代の私たちの生活にマッチしたもの、また今後の書がどんな方向に進むべきかなどについても深く心をよせた態度を育成してゆくよう徴力ながら指導にあたっている。

年一回社中展開催。



新 会 員 紹 介

篠崎 守	大森 資子	小川 美津子	谷口 大	寺崎 聡子	山崎 茂	米山 日出子	山中 良之助	伊藤 ミツ	大竹 キヨ子	小島 昭夫	松本 易子	堀越 すみ子	片浦 一夫	左川 誠	細川 清一
------	-------	--------	------	-------	------	--------	--------	-------	--------	-------	-------	--------	-------	------	-------

高島 博	柳 孝市	笹井 政友	矢野 栄二	秋山 節子	平松 芳子	腰高 徹	小池 由紀子	津布久 幸雄	初谷 隆造	釣巻 吉郎	○住所名変更	赤澤 豊	安生 浩亮	館沼 英男	渡辺 定夫	横塚 正男
------	------	-------	-------	-------	-------	------	--------	--------	-------	-------	--------	------	-------	-------	-------	-------

○退会者

石澤勇二(宇都宮) 吉田喜栄子(小山) 相田光男(足利) 金田光子(足利) 定方十四枝(足利)

○死亡(心からご冥福をお祈りします)

花塚清(佐野) 佐貫蕪(矢板) 柿沼基蔵(足利)

ご 案 内

第 9 回 「下野の書展」

昭和59年 9月6日より
9月10日まで

上野百貨店新うえの8階催事場

第二次県書道連盟中国研修旅行案

9	8	7	6	5	4	3	2	1	日次
成田 北京 発着	北京 万理の長城 明の十三陵 市内自由散策	北京 市内参観	泰安 泰山岱廟参観 濟南	泰安 曲阜市内参観	蘇州 蘇州 発着	上海 蘇州市内参観	上海 市内参観	上海 東京成田 発着	地名
帰着	北京	北京	濟南	泰安	曲阜	蘇州	上海	上海	宿泊

実施期日は、昭和六十年八月
上旬予定。

会費納入のお知らせ!!

誠に申し訳ございませんが、
会費未納の方は、総会時の
受付では混雑しますので、
会長宅の振替をご利用下さ
い。

住所と口座番号は、本会
報の題字下に掲載されてお
ります。

編集後期

諸先生方にはお多忙のところ
寄稿のご協力ありがとうございました。
お蔭様で、第四号も無
事発行出来ました。

今回は、早目に準備致します
また、書道誌、社中をお持ちの
先生方、三〇〇字ー五〇〇字程
度の内容で、会長宛に、原稿お
寄せ下さい。順次紹介して参り
ます。

尚、なれない者がやっておりますので、ご意見、ご希望等、
ございましたら、どしどしお寄
せ下さい。お待ちしております。